

(3面より)

▼一方で、全く違う酒の境地を詠ったのが白居易である。「酒に対す」詩に詠う。

蝸牛角上争何事	蝸牛角上 何事をか争う
石火光中寄此身	石火光中 此の身を寄す
随富随贫且歡樂	富に随い貧に随い 且く歡樂せよ
不開口笑是癡人	口を開きて笑わざるは是れ癡人

▼この詩は白居易五十八歳頃の作品。カタツムリの角の間隔くらい狭い世間で何を争うのだ、一瞬のような短い一生ではないか。それならば金持ちは金持ちなりに、貧しければ貧しいなりに楽しめ。酒を楽しく飲まないのは阿呆だと記す。この心境は、明らかに李白とは全く違う。置かれた状況の中で、自分の満足を見出すことを主張している。

▼次の詩は、四十五歳で痛切な挫折を味わった作者が、都から遥か遠い第二の赴任地で詠んだ、四十九歳頃の「東坡に種えし花樹に別る兩絶」という作品。

三年留滞在江城	三年留滞して江城に在り
草樹禽魚盡有情	草樹禽魚 尽く情有り
何處殷勤重回首	何れの処にか殷勤に重ねて首を回らさん
東坡桃李種新成	東坡の桃李 種えて新たに成る

花林好住莫??	花林好住して??する莫し
春至但知依舊春	春至らば但だ知る旧に依りて春なるを
樓上明年新太守	楼上 明年の新太守
不妨還是愛花人	還って是れ花を愛する人なるを妨げず

▼第一首は、辺鄙な任地で孤独な思いを慰めるために植えた木々が、今この地を離れることになってとても懐かしいという。第二首は、自己の心境を詠っている。花や木はすでに根づいて満足している。人の都合とは関わりなく春が来ればまた咲くのだ。それならば、次の太守も花を理解する人であってほしい、という。白居易の境地は、置かれた状況の中で自分を見失わず、自分らしく生きるということなのである。自分を誇示せず、自然(おのずから然る)に任せてすべてを許容する。これが白居易の「閑適」(心静かに楽しく過ごす)という心境である。それは根づいた土地で外敵や嵐に耐えながらじっと生きてゆく草木に似ている。

▼二人とも詩人として、千二百年以上の時を過ぎた今も愛される人物である。これほど異なった心境ではあるけれども、二人に共通するものは大陸の人らしい逞しい精神力ではなからうか。二人の生き方のどちらが良いかを決めるよりも、それぞれの生き方を示してくれた詩人から、読者自身の豊かな人生を創造して行くことが大切ではなからうか。それが古典の魅力でもある。

編集後記: 右写真は、生涯教育の君塚先生が韓国出張の合間に見つけ、撮影してきて下さったものです(2~3面記事を参照)。現状では、苦戦をいられている本学出版会ですが、国境を越えて「これからの教育と大学」が、読まれている可能性があるとなると、Press編集部としても励みになります。本のタイトルや内容はもとより、教員養成系大学のフラッグシップとしての本学の出版物であるということが、意外にもアピールしているのではないのでしょうか。

現在、16年度からの独法化に向けて、改組、6年制一貫教員養成、教育COEなど、様々な計画が実行されつつありますが、学生や日本の教育界に裨益するものであることを願うばかりです。そうした改革や計画の効果は、すぐには現れないかもしれませんが、思いもよらないところ、例えば外国から評価されるのかもしれませんが、それを信じて、出版会やPress Newsも、細々とでも活動を続けて参りたいと思います。(Y&S)



東京学芸大学出版会(Tokyo Gakugei University Press)

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学構内

編集: 渡邊健治(出版会編集長)・池田義人(事務局長)・腰越滋(Press編集長)

Pressについての連絡先: Email koshigoe@u-gakugei.ac.jp 又は 電話&Fax 042(329)7340(腰越研)

郵便振替口座番号: 00190-5-13873(寄付金納付の場合は赤枠用紙、会費納入の場合は青枠用紙をご使用下さい)

第2巻 第2号 (Vol.2 No.2)
通算 第4号
発行日 2003年1月1日
発行 東京学芸大学出版会
編集 東京学芸大学出版会事務局

東京学芸大学出版会(Tokyo Gakugei University Press)

巻頭言: 学芸大学出版会について考える

渡邊 健治(第二部長)

1991年にソ連邦が崩壊するとともに社会主義的な思考は低下し、昨年のニューヨークのテロによる貿易センタービルの崩壊後、タリバン政権の制圧、イラクへの国連による核開発への査察などアメリカの一極支配が強化されようとしている。ロシアは自己の存在をアピールしながらアメリカへの親密度を増し、いまや西側陣営の一員として振舞おうとしている。冷戦時代にあつて、ソビエトの研究を志した者にとっては複雑な感慨はかくせない。

私がロシア語を始めた1970年代の日本の教育学界は、ソビエト教育学・心理学の研究が盛んであった。ソビエト教育学の研究者でなくとも、教育学的研究を進めるにはソビエト教育学の動向や主張を視野に入れざるを得なかったと記憶している。ただし、日本におけるソビエト教育学研究はソビエト体制を批判する研究は少なかったし、ましてソビエトにおける教育学研究や著書は政府の検閲を経て出版されていた。その後、ゴルバチョフ政権になって多少自由な表現が可能になってわかってきたことだが、ソビエトにおける研究や著書は、政府の一定の見解に沿った形でしか出版できなかったということである。スターリンの独裁による粛清をみれば当然と言うこともできる。私は「思考と言語」で著名なレフ・セミョーノヴィッチ・ヴィゴツキーを研究対象としていた。ヴィゴツキーも批判の対象にされ、スターリン時代には著書はすべて没収され、民衆の目に触れることはなかった。その時代の人物の思想や教育論を研究している私にとってみれば、自由な表現を封殺され、無念さを噛み締めながらもなおおそなかで筆を進めようとした者のことを思いはせると、自由な表現ということがいかに貴いかを思い知らされる。

いささか、時代めいてしまったが、まさか、日本においては戦前・戦中のようなことはないだろうと楽観しながら、個人情報保護法案のような問題はあるにせよ、表現の自由を謳歌できる今日において、学芸大学の出版会について考えるところを少し述べてみたい。

東京学芸大学に出版会が設立されたわけだが、国立大学として出版会をもっているのは東大、東北大などの旧帝大を除いては、三重大と我が東京学芸大学だけである。大学出版会の多くはそれぞれの独自性を出しながら、出版を精力的に行っている。しかし、中・高校生ばかりか大学生までも文字離れが著しく出版界が不振で喘いでいる時に、大学出版会とて例外ではないという。学芸大学出版会も負債が心配だという声を少なからず聞いた。出版会は会員の会費によって運営されるシステムをとっているのが今のところその心配はない。そのため著書等の出版は自費出版を基本にせざるをえない。そうすると、多くの学芸大の教員にとっては、いかに学芸大の出版会とはいえ、自費出版ならなにも無理して出版する(2面へ)

学芸大 Press News

第4号 (Vol.2 No.2)

目次:

巻頭言: 学芸大学出版会について考える(渡邊 健治)	1~2面
東京学芸大学出版会 平成14年度会費納入状況:	2面
ニュース: 発見!ソウル一の書店に、『これからの教育と大学』が!! (君塚 仁彦)	2~3面
寄稿: 唐代における自由のあり方 李白の「孤高」と白居易の「閑適と」 (佐藤 正光)	3~4面
編集後記:	4面

(1面より)

ことはなく、市販の出版社で出したほうがいいとなる。ここが考えどころ、あるいは出版会の力量が試されるところである。それには、第一に魅力ある内容の著書の出版であり、第二は出版会の在り方である。

学芸大学出版会には学芸大学らしい著書の出版が求められる。学芸大学としてはその性格上教育関係の著書を中心することになる。そしてその特徴は学芸大学のおかれている位置と相似する側面がある。つまり、教育関係といってもその中でどういったものに独自性を置かかということになる。学芸大学の特徴は、広領域をカバーできる豊富なスタッフを有していることである。こうした特徴を考慮して以下のように考えられないだろうか。

まず、第一に、現在でも自費出版での企画を有している著者による出版を少しでも進めることである。自費出版でも出版会の支援によって経済的な負担を軽減する措置が可能な場合がある。また教科書などは、ある程度の販路が見込めれば出版会としてむしろ著者に働きかけて出版へこぎつける必要があるだろう。

第二には、ベストセラーの著者による協力である。現在でも、ベストセラーの著書を出版している教員がおられる。また、それぞれの領域で売れ筋の本を出している教員もおられる。こうしたスタッフの力を出版の企画から販売にまで生かすシステムを作らなければならない。これまでの著書に教育実践、教員養成の観点を入れての構成などが考えられるだろう。

第三は、広領域にわたるコンスタントな出版を企画することである。これは岩波のブックレット形式がそのいい例であろう。無理がなく、しかし学芸大学の特色をふんだんにだせるのではなかろうか。こうした企画からオピニオンリードできるシリーズがでてくれば幸いである。

第四は、テーマ性のある著書の刊行である。出版会の編集委員会あるいは個人の発意であっても、テーマ性と専門性の高いがっしりとした内容の著書あるいは講座本の刊行である。

次に出版会の在り方を考えてみよう。現在は国立大学にあって出版会を維持することは、様々な制限があって容易なことではない。学芸大学では誕生したばかりで、刊行された著書が少ないことや教員への情報が十分でなく会員数もまだまだけである。学芸大学には、潜在的な能力として、自費出版によってでも自分の著作を出版したいと考えている教職員は少なくないと考えられるので、当面は会員数が少なければ、自費出版に頼らざるえなくなる。

こうした制限の中でも、出版会を維持していることは大学評価において社会貢献の一つとして評価されるし、また学芸大学に出版会が設立された話をすると多くの大学の教員から賞賛の声が聞かれる。国立大学にあっては、出版会は同窓会等と同様に外郭団体であるが、法人化後は出版会を大学運営の一部にできるので、出版会の維持も容易になり、他の大学でも出版会を設立する可能性は大きくなる。従って、現在以上に競争が厳しくなることが予想される。法人化後は、学芸大学の出版会の運営形態も変わらざるを得なくなる。大学の考え次第では、外郭団体としてではなく、大学組織の一部となることも考えられる。そうすれば、出版会の性格自体も変わる可能性があるが、ボランティア精神で培った出版会の熱意が生かせるようなシステムにしていかなければならない。大学改革の中で教員の負担が増えつつある現在、出版会を支えている教員にもゆとりはないけれど、独立法人化を目前にして、出版会の活動がますます重要性を増している。今の出版会の在り方で十分な成果をあげ、その在り方を法人化後も大学が支えられよう形態にしていくなれば、今いっそうの努力が求められている。

東京学芸大学出版会 平成14年度会費納入状況

(平成15年1月7日現在72名。敬称略アイウエオ順)

赤司英一郎、浅野智彦、新井秀一郎、有吉正博、池田義人、伊藤清忠、伊藤友彦、伊藤良子、井上 巖、岩立京子、岩田康之、上野修、上野一彦、氏森英亜、大井田義彰、大河原美以、大澤克美、大橋道雄、岡本靖正、奥住秀之、角尾稔、金沢育三、金沢みどり、金田潮児、鎌田正裕、河添房江、河村正之、北野日出男、久場嬉子、倉持三郎、栗田伸子、黒石陽子、腰越滋、五関善四郎、小町谷照彦、佐島群巳、柴田義晴、杉原隆、鈴木甚五郎、千田洋幸、高田滋、高橋道子、武井のぶ之、多田俊文、谷俊治、次山信男、鶴原喬、永島惇正、中橋政則、中橋美智子、鳴海多恵子、根本正義、長谷川貞夫、長谷川正、濱田豊彦、福永礼治、本間二三雄、松崎奈岐、馬淵貞利、水田徹、水野孝雄、三石初雄、三橋文雄、村松泰子、安井電子出版、谷部弘子、山田雅彦、湯浅佳子、吉尾二郎、鷺山恭彦、渡邊健治、渡辺雅之

※会費納入、どうも有り難うございました。東京学芸大学出版会は、主に皆さまからの会費により運営されております。会員の方で、まだ平成14年度会費を納入されていない方は、至急の納入を宜しくお願い申し上げます。なお納入先郵便振替口座は、口座名：東京学芸大学出版会、口座番号：00190-5-13873(寄付金納付の場合は赤枠用紙、会費納入の場合は青枠用紙をご使用下さい) です。

発見！ソウル一の書店に、「これからの教育と大学」が！！

君塚 仁彦（第二部生涯教育）

2002年8月、私は研究会への参加と博物館調査のため韓国を訪れたのですが、その際、ソウル市最大の書店であるキョボ書店に立ち寄る機会がありました。日本でいうと紀伊国屋に匹敵するような巨大な書店でしたが、なんとそこに、わが大学出版会の『これからの教育と大学』が二冊も置いてあるではありませんか。キョボ書店は洋書や日本の学術書の品揃えも豊富で、外国書籍のため価格は25660ウォンと少し高めでしたが、店員に尋ねたらすでに何冊か売れたそうです。『これからの教育と大学』、韓国でどう読まれているのでしょうか？日本国内でも滅多に見かけない本書を、まさかソウルで見るとは思わなかったのと、売れたという事実に感激して思わずデジタルカメラで撮影してきました。(3面へ)

(2面より) 店員は不思議そうな顔をしていましたが、できれば出版会を朝鮮語で宣伝したかった！できない自分に悔しい思いを抱きました。店内はたくさんの学生さんでごった返していましたが、日本の教育事情を学んでいる学生でしょうか、熱心に日本の教育関係書を手にしていく姿が印象的でした。朝鮮語ができれば、宣伝できたのに・・・ああ、実に悔しい限りです。日本の書店でこれだけハングル文字の書籍が置いてある所はありません。日韓の学術・文化交流のあり方を、書店を通して考えさせられた、でも嬉しい一日でありました。(写真は4面にあります)

寄稿： 唐代における自由のあり方

—李白の「孤高」と白居易の「閑適」と— 佐藤正光 (第一部中国文学)

▼周知のように、中国では秦の始皇帝が国を統一して本格的な封建制を敷いて以来、二千年にわたって封建的秩序が守られてきた。唐代(六一八—九〇七)にもそれは同様だが、当時の人達が自由を求めていなかったわけではない。身分や秩序に拘束されない自由な心境、境地というものを、唐代の詩人は酒にことよせて詩に詠じている。

▼酒の席では秩序にこだわらないという考え方は、中国では古くからあった。酒を飲んで自由奔放に振舞ったことでは西晋の竹林の七賢が有名であるし、その境地を初めて詩にしたのは東晋の陶淵明だと言われている。陶淵明は「飲酒」という詩で、例えば「父老雑乱して言い、觴酌行次を失す」(其十四)のように、酔っ払うと年配の者は筋が通らぬ話をするし、若者も酒を注ぐのに序列をわきまえないと詠じている。

▼このような詩境をとりわけ愛したのが、かの李白である。その酒にまつわる詩の代表作と言えば、まず次の詩であろう。

兩人対酌山花開	兩人対酌すれば山花開く
一杯一杯復一杯	一杯一杯 復た一杯
我醉欲眠卿且去	我酔いて眠らんと欲す 卿且く去れ
明朝有意抱琴来	明朝意有らば琴を抱いて来れ
(「山中与幽人对酌」詩 山中 幽人と対酌す)	

▼第一句の「山花開く」は自然(おのずから然る)の境地を暗示し、第二句以下には拘束のない隠者との酒宴の様子が描かれる。李白二十代の作と言われる、屈託のない作品である。次の詩もまた有名な作品。

花間一壺酒	花間 一壺の酒
独酌無相親	独り酌んで相親しむ無し
举杯邀明月	杯を挙げて明月を邀え
对影成三人	影に対して三人と成る
月既不解飲	月は既に飲むを解せず
影徒随我身	影は徒らに我が身に随う
暫伴月将影	暫く月と影とを伴いて
行楽須及春	行楽須らく春に及ぶべし
我歌月徘徊	我歌えば月徘徊し
我舞影零乱	我舞えば影零乱す
醒時同交歡	醒時は同に交歡し
醉後各分散	酔後は各おの分散す
永結無情遊	永く無情の遊を結び
相期邈雲漢	相期す邈かなる雲漢に
(「月下独酌」詩)	

▼晩春の花の咲く下で、一人、月と自分の影とを相手に酔って戯れるという詩である。詩の最後の「無情の遊」がこの詩の心境である。世のしがらみや秩序などに縛られない自由な交遊、その楽しさを述べている。いかにも李白らしい作品でありながら、これは李白四十四歳、楊貴妃と宦官高力士に疎まれて都を追放された春(七四四年)のもので、そこはかたない孤独が感じられる詩なのである。

▼次の詩は、李白の晩年五十三、四歳頃の作品。

衆鳥高飛尽	衆鳥 高く飛んで尽き
孤雲独去閑	孤雲 独り去って閑たり
相看兩不厭	相看て両ながら厭わざるは
只有敬亭山	只だ敬亭山有るのみ
(「対坐敬亭山」詩 独り敬亭山に坐す)	

▼この詩は、山の景色を眺めて楽しみ、自然と一体となった心境を詠ったとされる。だが、そこには一層の孤独感が認められる。李白の後半生は、自分を孤独へと追い込んでゆくような人生であった。強烈な個性を貫くことで自らの自由さを保障したのである。それが「孤高」の詩人と称される所以であろう。(4面へ)